



教養 と明治学院の学生

著者	水落 健治
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュー ースレター
号	24
ページ	2-7
発行年	2001-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10723/298

〈教養〉と明治学院の学生

水落 健治

今回の研究所の合宿で「一般教育の問題・教学改革の問題」を考えることになったとき、常にふたつのことが私の脳裏から去りませんでした。

その第一は、「これまでの教学改革の議論の中で〈教養とは何か・専門とは何か〉ということが、学部を超えて話し合われたことがあったらどうか」ということです。私は、これまで、教学改革の問題にそれほど積極的に関わってたわけではないのですが、この十年間の学内の動きを振り返ってみると、「明治学院は〈教養と専門〉という問題をどのように考えていくのか」という問題が正面切って論じられたことは、今まで全くなかったのではないかと、という気がいたします。そんな中で、今後の学院のことを考えて行くためには、やはり一度この問題を考えてみる必要があるのではないかと、という気がいたしました。

その第二は、早稲田大学のことです。先日、中世哲学会という学会があったのですが、その席上、早稲田大学の広報部長をしている友人から、「早稲田大学が今後十年位かけて〈教養学部〉を作ろうとしている」ということを聞かされました。早稲田の学長や執行部の人々は、様々な企業のトップと会うことも多いのですが、企業のトップたちは異口同音に「最近入社してくる学生たちの中には骨太の人間が少ない」と言うのだそうです。これはどういうことかということ、「与えられた専門のことを解決する能力はあるけれども、これに入らないような出来事が起こったときに、それに果敢に対処していけるような人間が非常に少なくなった。だから企業としてはそういう人間を今求めている」ということなのだそうです。そこで、そういうことがあまりにも頻繁に聞こえてくるので、結局早稲田大学としてはこれから10年計画ぐらいで教養学部を作ることを決めて、現在すでにそのためのプロジェクトが具体的に動き始めている、とのことでした。

そんなことを考えながら、私は、「教養とは何か、専門とは何か」ということを一度考える機会があっても良いのではないかと、思いました。

以上のことを踏まえて、今日は私自身の授業に即しながら二つのこととお話しようと思います。その第一は、「教養とは何か」ということです。「教養」とは、ギリシア語では「パイデイア」と申しますが、特にギリシア人たちがどのような意味合いでこの語を使ったのかをまずお話します。そして、その後で、この「教養」という問題に対して、明治学院の学生――私の授業をとった学生ですが――がどのようなことを考え、どのような気持ちでいるのか、という具体例を話させていただきます。

というのも、今年度の後期からなのですが、私は『キリスト教の諸相』の授業で新しい講義を始めました。「理性と信仰」あるいは「宗教と学問」というテーマのもとに、まずギリシアの知識論の話をして、それからユダヤ・キリスト教の話と教父の話をして、そこで出てきた様々な問題が、13世紀ヨーロッパの「大学の成立」、知的共同体としての「大学の成立」という出来事において、どのような形で展開していったかを話そうと考えたわけですが、この計画のもとに、まずギリシアの話を始めましたが、そうしましたら、私自身が思っている以上に学生は「教養」とか「知識」とかの問題を考えていることが分かって来たわけですが。私は、毎回授業の後に、感想や質問を学生に書かせているのですが、その内容が、本当に私自身も驚き考えさせられてしまうことが多いのです。

そこで、話の後半では、そのような学生の生の声を幾つか紹介しようと思います。大体以上が、私の話の大枠です。

1. 教養の軽視 = 人間の自己形成に関する無関心

そこで、「教養とは何か」という本題に入るわけですが、この話を、最近私のもとに送られた一冊の本から始めようと思います。それは、稲垣良典監修『教養の源泉をたずねて』（創文社）という本です。これは、現在大学が直面している学部改組の問題を念頭に置きながら、トマス・アクイナスの専門家である稲垣先生を中心に、中世哲学の研究者たちがそれぞれの専門領域を軸に教養の問題を論じた書物なのですが、その中に次のような一節があります。

したがって、上記の教養軽視の動きはいずれも1つの事柄を原因として引き起こされていると言って過言ではないだろう。それは人間がいかんにして形成されるのかという問題に関する無関心、あるいは理解の欠如である。言い換えると、すべての者が求めている幸福についての無関心、無理解である。（この点については、教養の復権を唱えるかのような書物でも、全く同じ状態であると言えよう）。人間であることの心底からの喜び、人間であることの底知れぬ不安といったことが個々の人を動かさなくなったのであろうか。深遠から脅かされ、しみじみと感じられるものがかき消されるほどに外部の雑音が強力になり広がってしまったのであろうか。人々の衷心から求める心を妨害する働きの一つに学校教育が数え上げられるのは、皮肉なことである。しかし、現実には学習者の幸福実現を目的とした本来の学習、真理の探究は学校現場から影を払っていると言ってまたないであろう。学習者は断片的な知識を有用な情報としてありがたいのであり、またこの知識の増大することをもって成長と錯覚して喜ぶのである。（46-7頁）

私はこの一節を読んで深刻に考えさせられてしまいました。「人間がいかんにして形成されるかという問題に関する無関心。これが教養軽視につながっていく」-----これがまさに現代の大学の置かれている状況を言い当てているように思われたからです。

そして、このような脈絡で改めて考えてみると、古代のギリシア人たちは、「教養」の問題をまさに「人間形成」との関連で見えていたわけです。

2. 専門教育 = 奴隷の教育

ではギリシア人たちは「教養」（パイディア）をどのようなものとして考えていたのか。以下、このことを示している典型的なテキストを掲げます。

1. [ソクラテスの弟子アリスティポスの言葉]

無教育な人間であるよりは、むしろ乞食である方がましだ。乞食に欠けているのは金だが、無教育な者には人間性が欠けているからだ。

（ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』2.8.70）

2. [アリスティポスについての逸話]

ある人が息子を弟子入りさせるために彼の所へ連れてきたら、彼は500ドラクメを請求した。そこでその人が「それだけ出せば、奴隷が1人買えますよ」と言うと、「では、そうなさい。そうすれば、あなたは奴隷を2人持てるでしょう」と彼は応じた。

（『同上』2.8.72）

3. [アリスティポスについての逸話]

ソクラテス派の哲学者アリスティッポスは、難船してロードスの海岸に打ち上げられ、そこに幾何学

的図形が描かれてあるのに気づいたとき、仲間の者たちに向かって叫んだ、「きっといいことがあるぞ。人間の痕跡がここに認められるから」。(Vitruvius 6.1)

嵐がその人物を大海原から見も知らぬ土地の荒涼とした浜辺に押し流したとき、他の者たちは見知らぬ土地のこととて怖れおびえたが、彼は浜辺にある幾何学的図形の描かれているのに気づいた。これを見ると彼はこう叫んだと言われている。「元気を出せ。人間の痕跡があるぞ」。彼はしかし、このことを、彼も目にした耕作地からではなく、学問のしるしから解したことは明らかである」。

(Cicero, Rep. 1.29)

これらのテキストから、私たちは次のことを知ることができます。

1. 教育・教養とは、人間が人間となるためのものである。
2. 教育・教養を持たない人間は奴隷であり、これを持つ人間は自由人である。
3. 教育・教養は、実利的・専門的知識（耕作地の技術）からではなく、非実利的な学問（幾何学）によってもたらされる。

実はこのテキストの出典は、廣川洋一『イソクラテスの修辞学校』（岩波書店）という書物なのですが、廣川先生は同書の中で、3のテーゼをさらに過激に展開してこういっておられます。

4. 専門教育とは奴隷の教育である。

廣川先生がなぜこのようなことを言っておられるのか----このことを知るためには、古代ギリシア社会における「自由人」や「奴隷」がどのようなものであったかを知っておく必要があります。

具体的に言うと、市民権を持ったギリシア人たちは家長でした。ギリシアの家は、かなり大所帯であったわけです。そしてこの家の中には多くの奴隷がいました。例えば家の財政をつかさどる会計士、子供を教育する家庭教師、それから馬の面倒を見る馬丁もいました。家に耕作地がある場合には農夫もいました。奥さんというのはいわゆる主婦で、家の台所系統を取り仕切っているわけですが、この主婦の指示の下に買い出しに行き食事を作る女中もいました。そしてそのような奴隷たちは自分たちに与えられた仕事のみを行なう、いわゆる「専門家」として雇われていたわけです。そして主人はそういう奴隷たちを使って、家の全体的な運営を行なう。つまり、家の全体的な運営をやるというところに、自由人である主人の力や役割があるわけですね。これが、ギリシアの家の制度であったわけです。

3. 教養とは何か

このようなことを考えてみると、「教養をもつ人間は自由人である」といわれることの意味もおのずと分かってきます。つまり教養とは、特定の専門領域の考え方に「縛られる」ことなく、様々な知識を「自由に」用いて問題を解決して行く能力なのです。しばしば、大学の教養科目のことを“liberal arts”と呼びますが、この“liberal”という語のニュアンスはこの点にあるわけです。

というわけで、「教養とは何か」という問に対しては、次のような定義が与えられると思います。

教養とは、自らの前に与えられた課題に対して、あらゆる知識を総合的に動員して解決していくことのできる能力である。

考えてみると、われわれが「生きる」ということは、まさにこのような〈総合的問題解決〉の連続なわけです。われわれは、生まれたときからこの方、様々な試行錯誤や挫折を繰り返しながら、眼の前に置

かれた課題に立ち向かい、自分のもてる知識を動員してこれを解決しようとし、〈自己実現〉を果たそうとしている。そして、この〈自己実現〉の結果はじめて、人間は「人間となる」のです。ギリシア人が「教養とは、人間が人間となるためのものである」と主張したのは、まさにこの意味においてだったといえるでしょう。

では、自己実現をして人間となった人、つまり教養ある人とはいかなる人なのでしょうか。紀元前四世紀の教育者・修辞学者イソクラテスはその理想をこう書いています。

いかなる人をもって教養ある人と呼ぶべきであろうか。まず第一に、日々に出会う物事を立派に処理し、物事の好機をとらえ、そして多くの場合有益な策を得ることのできるドクサ（健全なる判断）を持つ人びとがそれである。第二に、常に仲間として交わる者たちとふさわしくまた正しく交際し、他の人びとの与える不快や無礼も静かにそして容易に耐えることができ、仲間たちにたいして自分自身をできる限り爽やかに、節度あるものとしてしうる人びとがそれである。第三に、快樂をつねに支配することができ、不幸によっても過度に圧倒されず、それらの不幸のもとにあっても勇敢に、そしてわれわれが等しく授かっている〔人間の〕本性にふさわしい仕方で、耐えることのできる人びと。第四に、そしてこれが最大のものであるが、成功によって身を滅ぼすことも、自己を見失うことも、傲慢となることもなく、思慮に富む人びとの列に留まり、彼ら自身の本性と思慮によって最初から生じたものよりも偶然によって彼らのもとに生じ来たものを喜ぶようなことは決してない、そういう人びとである。それらの事項の1つだけではなく、それらのすべてに対して、精神のよき調和をもつことのできる人びと、この人びとを、私は、賢き人、全き人、すべての徳をもつ人と呼ぶのである。

（『パンアテナイア祭演説』30）

以上の説明で、「教養」（パイデア）なるもののおおよその輪郭が明らかとなったのではないだろうか。

4. 学生たちの反応

さて、私は『キリスト教の諸相』の授業で、以上のようなギリシア人の教養観を学生にぶつけてみたのですが、そうしましたら、私の想像をはるかに上回るショッキングな反応が返って来ました。以下、特に考えさせられたものを紹介いたします。（研究会では、学生の生の声を紹介したのですが、ここでは紙面の関係で要約に留めます。）

1. 「現代の日本社会では、断片的・専門的知識しかない人が、総合的判断をすべき立場についている。」
（第二部社会福祉学科女子・社会人入学）

このことを指摘したのは、社会人入学で入って来た看護婦の学生です。彼女は、看護婦としてすでにある程度のキャリアをもち、新人看護婦を教育しなければならない立場にありますが、狭義の専門教育としての医学教育しか受けてこなかった医師が、医療現場では、本来教養教育を受けた人が就くべき地位についていること、そしてそこから様々な矛盾が生まれているを痛切に感じ、そのことを訴えていました。

2. 「この世界で働く人のほとんどが奴隷なのだ。どんなに頑張っても命じられたことしかできない。アルバイトなんてもろにそうだ。」（第一部社会学科女子）

現代社会は、ほとんどの人間が奴隷として働かされる、そういう構造になっている、自由な判断

が可能な場所に立つことのできる人間が非常に少ない、という指摘です。私は、この感想を読んで、「大学で専門教育ばかりやるということは、結局、一部の自由人の意のままになる〈奴隷〉ばかりを社会に送り出していることになるのではないか」と考えてしまいました。明治学院の建学の精神である「人格教育」との兼ね合いを考えてみる必要がある、と思いました。

以上ふたつの感想は、教養（パイディア）について話したときのものですが、私の授業では、その後で、プラトンとアリストテレスのテキストを使いながら、「確実な知識」、「真理」、「善」の話をしました。以下はその時の学生たちの感想です。

3. 「この世の中に真とか善があるのかどうかということは、現在の私も考えていることである。でも、答えはいまだに見つからない。それでも必ずどこかに答えがあると信じて、今も探し続けていた。そしたらこの授業の中で、プラトンの考えに出会うことができた。アイデアについても早く知りたいし、もっと研究してみたいと思った。」（第二部英文科男子）

「真理」とか「善」などという語は、今の学生にとって死語になっているのかと思ったら、そんなことはないのですね。この学生の真剣な探究の眼差しに接し、このような学生が今でもいるのだということ知って、私は勇気づけられる思いでした。

4. 「知ることはなぜ喜びにつながるのだろうか、今日の講義を聞いていて思いました。人間は、常に知ることを欲望に飢えているような気がします。なぜ知りたがるのかについて考えてみても、まだはっきりした答えが見つかりません。ただ、知ることが喜びに変わることは事実であると思いました。」（第二部英文科男子）

「知の喜び」——これもいまだ死語ではないのだと思いました。

5. 「人は知りたいという欲求が強いのだなあと思いました。最近、私は知りたいなと思うことがありません。あいまいな知識がたくさんあり、そのあいまいな知識だけで処理しているからだと思えます。あいまいな知識を確かな知識とし、正しく判断したいなあと思いました。」（第一部経営学科男子）
確実な知識を求めつつも曖昧な知識の洪水に窒息しかけている現代の学生の「叫び」が聞こえるようです。

授業では、以上のような話と平行して、人間が真の知識や教養を身につけるための〈方法論〉の話もしました。プラトンやイソクラテスが述べている「対話」（ディアレクティケー）のことを話し、他者との共同探求を行なうには、自分の考えていることを〈言語化〉する必要があること、日本人が外国人とコミュニケーションできないのは、外国語能力の不足よりも、自分の考えを〈言語化〉できていないことにその根拠がある、ということをお話しました。するとある学生がこう書いて来ました。

6. 「古代ギリシアの人々の思想は現代社会に当てはまるということに、同じことを感じました。でもこのことだけでなく時代、時代にいろいろな考え方や思想が生まれ伝えられていることは、現代社会に当てはまることが多いはずだと思う。言葉で正しく伝えることは本当に一番必要であり、本当に難しいことではないでしょうか。私はそれが苦手だ」（第二部英文科男子）

5. 幾つかの提言

このような学生の反応を見てみると、学生は、われわれ教師が思っている以上に、アルバイトなどの様々な場面で時代の現実に直面し、その中で「変わらないもの」を求め〈自己実現〉をして行こうとし

ているように思われます。このような学生の現実を踏まえ、先に述べた教養の概念なども考えあわせながら、最後に、大学のカリキュラムに関する幾つかの提言をさせていただいて話の締めくくりとさせていただきます。

1. 転部、転学科、学部間にまたがる履修を容易にする教育システム

もし教育・教養が「自己実現の過程」であるとする、自己実現には試行錯誤と挫折とが必ずつきまとうものですから、学生の「揺れ」に柔軟に対応できる教育システムが重要になって来ます。私の学部時代を考えてみると、母校であった国際基督教大学(ICU)のこのような教育システムにどれだけ助けられたか分かりませんし、また、私が留学していたミュンヘン大学----ここはドイツ文学だけで一万人の学生を擁するドイツ一の大学ですが----にもこのシステムがありました。

2. 学生に、自ら考えていることを〈言語化〉する場を与える教育システム

これは、今紹介した学生の感想との関連で、もうお分かりだと思います。

3. 〈自らの専門とは異質の思考様式 Denkweise〉に触れ続けることができる教育システム

学生が専門の中に入っていくと、どうしてもものの考え方がひとつに凝り固まり狭くなりがちです。そのような上級生の時程、異質の思考様式に触れる必要があると考えます。このことによつて専門の学習も活性化して来ると思われるのですが....。私は哲学の学徒ですが、学部時代に学んだ数学の授業（ユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学 とを平行してやらされた）と経営学の授業（自ら社長になり会社を倒産させないように仕入と在庫管理を行なうシミュレーションをやらされた）は今でも鮮明に脳裏に焼きついています。

4. 学生が日常的に経験できないような経験を与える実践的カリキュラム

前項 3 とも関わることですが、学生が、たとえば知恵遅れの子供の施設でのボランティアなどを経験すると、相当のショックだろうと思います。日常の世界とは全く違う世界を見るわけですから。そのような異質な世界の経験が、学生の経験・知識の幅を広げ、成長を促し、知的営みにも深い影響を与えることは改めて述べるまでもないことでしょう。

* * * *

以上で私の話は終わりなのですが、最後にキリスト教の問題ということで、スイスの哲学者カール・バルトの「教養」(Bildung) の定義を掲げさせていただきたいと思います。バルトはこう語っているわけですね。

教養とは、人間存在をその起源的、最終的、本来的な規定と可能性への考慮において形成していく外的、内的な形成の課題である。

今回は、主に「教養と専門の関係を明確にする」、「教養の概念を明確にする」ということで話をしたものですから、「教養と専門的訓練(disciplin)との関連」という、もうひとつの非常に重要なテーマについては触れられなかったのですが、これについてはまた機会を改めて考えてみたいと思います。

(みずおち けんじ 所員・一般教育部教授)